

考古学とロマン

尾花沢市芭蕉・清風歴史資料館 大類 誠

青森県三内丸山遺跡の巨柱遺構、富山県桜町遺跡の大量の建築部材、新潟県奥三面遺跡群の大土木工事跡、埼玉県小鹿坂遺跡での約五十万年前の石器の発見とともに、それらの石器を囲むようにして検出された柱跡。相次ぐ「発見」の報道は、日本人の注目となり、遺跡の一般公開となると歴史ロマンを求める人々や考古学を学ぶ者はもちろんのこと大勢の人が詰めかける。これは遺跡というものが特別なものではなく人々の生活の中で身近な存在になった現れであろう。

私も考古学を学ぶ一人として、「大発見、新発見」は心を躍らせ時間を超え過去の人々たちへの想いを馳せる。それでいつも思いだすのが私が考古学に足を踏み込むことになった事件である。昭和四十二年の夏、小学校六年であった私は、数人の友人と共に沢力二を捕まえに牛房野のオトリ沢に出かけた。しかし、前日の大雨で沢が増水し、捕まえることができなくて非常に悔しい思いをした。がっかりしている私に友人が言った。「すぐそばで土器や石器がたくさん出るところがある」。案内され行ってみると地表には

大きな縄文土器の破片が落ちていた。手にすると子供なりに不思議な感動を覚えた。無我夢中で掘っていると次々と縄文土器が出てくる。それまで理系であった私が文系に変わった瞬間である。それからというもの、時間を見つけては、オトリ沢遺跡に通うこと一年、膨大な資料が手元に集まり喜んでいった。

ところが、父と父の友人である考古学の先生に大目玉を食らう。私のやっていたことは、「文化財保護法」に触れる事ではやってはならない「盗掘」であった。逆にこの教訓が真剣に考古学の道へと歩むきっかけとなる。

小学生の頃から考古学に取りつかれた少年のことを、俗に「じゃり考」とか「考古ボーイ」という。多くはロマンチストの少年が多いようである。

その少年が成長し自分の将来の道を真剣に考える時期に大きな壁に突き当たる。考古学という学問の厳しさを思い知らされるのである。少年が抱いたほのかなロマンは大きな転機を迎える。

私の尊敬する考古学者で長野県諏訪出身の藤森栄一の手記がある。

『かもしかみち

私の考古学手帳から』

深山の奥には今も野獣たちの歩む、人知れぬ路がある。

ただひたすら高きへと高きへと、それは人々の知らぬけわしい路である。

私の考古学の仕事は、ちょうどそうしたかもしかみちにも似ている」

この手記は考古学という学問のロマンと厳しさを謳歌した藤森の人生そのものが謳い込まれているといっても過言ではなからう。

考古学的な「発見」は、時として大きな脚光を浴び一見するとすごぶる華やかに見える。しかし、その「大発見、新発見」というのは決して偶然なことではない。今まで発掘調査された遺跡の成果、その陰には何万もの遺跡が消滅している事実、そして、今でも日本のどこかで発掘調査に携わる人々の根気のある作業と綿密に計画された調査の中から生み出されていくものであることを私たちは忘れてならない。考古学的ロマンはそうした地道な発掘調査、整理分析の積み重ねの中にある厳しいロマンともいえる。